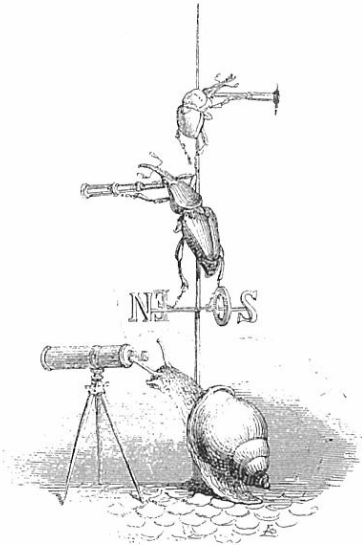


フィールド 便り



リレー連載

忘れられた当たり前を探す！

目からウロコのフィールドワーク⑤

人がマイクを握るとき

大橋麻里子

おおはし まりこ

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程二年
(専攻はアマゾン地域研究)

アマゾン川源流の一つペルー・ウカヤリ川。その先の三日月湖をいくつか通り抜けると、ドス・デ・マジヨ村に辿り着く。森に囲まれ、壁のない住居

が並ぶ。主にシピボとよばれる人々が一〇〇人ほど住む小さな村だ。

夜、蚊帳越しに眺める月は、朝露で濡れた蜘蛛の巣のようだ。村では朝も夜も色んな音が響く。雷の轟き、サルが熟れた実を食べながらあげる喜びの声、太陽の光を待ちかねたニワトリの羽音。夜明け間近には、村内放送のマイクを握り、誰かがしゃべり始める。

「おはようございます、えーと、昨日も言いましたが、ハイメさんのお家にあったバナナが盗まれました。子供たちは勝手によその台所に入らないよう

に。それから、今日は集会をやるので午後三時に小学校に集まってください。なぜ盗んではいけないのか、集会で何を話すつもりなのか、と丁寧な説明も加わる。朝の挨拶は長いと一時間を越える。何かを話したい人は好きな時にマイクのスイッチを入れる。

宴会があれば、酔っ払ってマイクを握る者もいる。「魚を獲って畑を作る。それが男だ！…(テーマが次々と変わりながら発話は続く)…それでは、みなさんお待ちかねの音楽をかけます」と締め括られ、陽気な曲が流れ出す。あまりにしゃべりすぎると「マイクの男」とあだ名が付けられることもあるが、酔っ払ってマイクを手に話すのは、なかなか気分がよさそうだ。

日が暮れて、酔いつぶれて帰って来ないおとうちゃんに呼び出しが掛かる。おかあちゃんに言われて子供がマイクに叫びに走ったのだ。こうして、大人が子供に話をさせることもあるが、基



図1 拡声機で話し中の村人(中央)と順番待ちをしている村人(左)。他の人が話している時は邪魔せずに待つのが基本的なルールのひとつ。子ども(右)もこうして目で見て、耳で聞いて、村のルールを日々学んでいく。

本的にマイクを握るのはある程度の年齢になった人たちである。
中学生くらいになればスポーツ推進委員会、子供がいれば母の会などの責任者を任されるようになり、集会運営に関わることになる。以前は、底が抜けたビンをブオーと吹いて集会の始まりを知らせていたというが、二〇〇六年頃に村内放送が設置された。集会の



図2 ドス・デ・マジョ村の人たちとシピボの民族衣装を着せてもらった筆者。

お知らせだけでもあっても、マイクを握るようになるということは、村で責任のある任務を担うようになったことを意味する。
一九九〇年代までは、月明かりの下で子供たちがおじいちゃんを囲んで昔の話聞いたそうだ。しかし、近年は核家族化が進み、年長者と子供は別に生活をするようになった。世代を超え

て一緒に過ごす時間は減った。そうした「かわり」に飢えた村のおじいちゃん、マイクを手に取り、昔話を語り、そして即興歌を口ずさむ。それを聞いた若造たちは「また聞かせて欲しい」とおじいちゃんに近寄る。こうして、薄れかけていた「かわり」が復活することもある。

村内放送という近代的なモノ。この村では、ストレス発散や昔ながらの自然と生きる知恵を伝達する手段とされ、他の人とうまく生活していくための道具として、人びとに使いこなされてきた。「誰かとつながりたい」という欲求、その反対に「距離をとりたい」という気持ちに駆られて、人はマイクを手取る。

はて、ところで日本の私たちは、欲求を満たすために何かを使いこなしてきただろうか。それとも……実は、私たちがモノに扱き使われてきたということは無いのだろうか。